



みんながつながり 「夢が育つ学校」に

国立二小だより

平成28年12月1日

国立市立国立第二小学校

校長 小林 理人

心のバトンをつなごう

～豊かな心を感じた11月（ふれあい月間）の出来事～

校長 小林 理人

「かわせみだ。」子どもらのかには、首をすくめて言いました。

お父さんのかには、遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのぼして、よくよく見てから言いました。

「そうじゃない。あれはやまなしだ。流れて行くぞ。ついていってみよう。ああ、いいにおいだな。」

なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。

これは6年生の国語の教材として長く親しまれている宮沢賢治の「やまなし」の一節です。

6年生の教室で感じた「心」

10月から11月にかけて、全ての学級の授業観察を行いました。今年度は「どの子供にも分かる授業、楽しい授業」をめざして、焦点化（ねらいや活動をしぼる）、視覚化（目で見て分かりやすく）、共有化（友達の力も借りて）を意識した授業づくりを進めています。その様子を中心に、各担任、専科教員が力を入れている教科の授業を見ました。

6年生は「作者や自分の思いが伝わるようにやまなしを朗読する。」ことを目標にした国語の授業でした。そして、その授業で感じたのは、「朗読発表会を成功させたい。」という担任と子供たちの強い思い「心」でした。

子供たちと担任の「心」を伝える

授業が終わり、ふと私は、担任をしていた頃、「やまなし」を教材に授業を行ったことを思い出しました。宮沢賢治の独特の世界観を子供たちが味わうことができるように、様々な工夫をした思い出があります。冬の冷たい川底の雰囲気を一変させる「やまなし」の存在感は、いつの時代にも通用する強いインパクトがあります。

「先生、やまなしって本当にあるの？」「やまなしって何？」

教材文を読み深めていくと、子供たちの関心はタイトルでもある「やまなし」に向かいます。子供たちに、「やまなし」を見せてあげたいと思ったものです。

私は、二小の6年生にも「やまなし」を見せてあげたいと思いました。

そして、「やまなしの木がある」という情報を思い出し、5年生の野外体験教室でお世話になった清里にある施設に電話をしました。やまなしの授業のことや、子供たち・担任の思い「心」を伝え、「朗読発表会に向けて頑張っている子供たちや教員に本物のやまなしを見せてあげたい。」とも話しました。すると、施設内にやまなしの木があることや、受付に木がある位置を示した地図を用意しておいてくれるといったうれしい返事がありました。

施設の方の「心」を届ける

電話をしてからなかなか現地に行くことができず、1週間が過ぎました。半分あきらめかけて現地に向かい、施設の受付で電話での依頼について話をすると、施設の方が、

「今日、電話対応をした担当は休みですが清里にある、国立二小の皆さんにお渡しするものがあります。」

と言って一枚の地図と小さな白い箱を手渡してくれました。その箱を開けると小さなやまなしの実が白い綿に包まれて入っていました。そして、地図を見ながらやまなしの木があるところに行ってみると、既に実や葉っぱがすっかり落ちたやまなしの木がありました。その何もなくなったやまなしの木を見ながら、対応して下さった施設の方の「やまなしの実を見せて上げたい」という子供たちへの優しい「心」を強く感じ、胸が熱くなりました。次の日、私は小さな白い箱に入ったやまなしの実を施設の方の「心」と一緒に担任に渡しました。

数日が過ぎ、6年生の子供たちが朗読発表会に招待をしてくれました。朗読発表会では、自分たちが読み深めた宮沢賢治の世界を一生懸命に伝えようとする姿がありました。そして、その姿からは子供たちの感謝の「心」も感じました。

その後、私はその時に感じた子供たちの「一生懸命な心」「感謝の心」を手紙にして、心のこ

もった対応をしてくださった施設の方にお届けしました。